開会挨拶

京都大学副学長　　藤井　信孝 (研究・国際交流担当理事)

皆さま、朝早くから、また、足元の悪い中、たくさんお集まりいただきましてありがとうございます。このシンポジウムは、京都大学の附置研究所及び附置センターの先生方が協力して、もう４回を重ねます。回を重ねるごとに認知度も高くなってきまして、たくさんの皆さま方の興味の対象となってきました。特に本年度は「学問のつながりのユニークさ、それがつくる明るい未来」ということをテーマにしています。ご承知のように、本年は例えばアメリカのサブプライム問題をきっかけにして、大きなグローバルな不況の時代にあります。出口の見えない不況も忍び寄っているという状況の中で、こういったものを直ちに解決するというのはなかなか難しいのですが、そういったものを解決する糸口となる科学、学問の重要性というものは説明の必要もないことと思います。

京都大学は、それぞれの学問領域を深く掘るというだけではなくて、学問と学問のつながり、特に俗に言う学際融合、インターディシプリナリーな研究に非常に力を入れています。その中で、本日は２２研究所及びセンターの先生方が力を合わせて本日のシンポジウムを企画されました。この中には学際融合の中でも特に今、京都大学の中で進めています、例えば「こころの未来」であるとか、あるいは野生動物、あるいは物質－細胞統合システム拠点といったような新しい試みの研究をされている先生方もいらっしゃいます。そういった京都大学の伝統、歴史、学問に対する物の考え方、こういったものが、きっと今の閉塞社会を将来において打ち破っていくものだろうと確信しています。

私は山口県の出身ですが京都に住んで４０年になります。その中で、京都大学のおもしろさというものはどういうことなんだろうかと考えますと、旧七帝大の中では一番キャンパスが狭い。その中で、一応、肩と肩をぶつけ合いながら、夜は祇園あるいは先斗町で遅くまで議論を闘わしながらやってきた学問。こういったものから非常にユニークな研究が出てくるものと思っていますし、それを支えているのが京都大学の附置研究所・センターです。

本日も、２２の研究所・センターの中から５つの研究所・センターの先生、非常におもしろい研究をやっておられる先生方を演者に選びまして、これまで京都大学が培ってきた研究、今やっている研究から、ぜひ、サイエンスのおもしろさ、醍醐味を感じ取っていただきたいと思います。簡単ですが、ご挨拶にかえさせていただきます。どうもありがとうございました。